

## 私見としての認知的アプローチのメリットと課題

- ・従来の進路研究は、発達論、学習論的アプローチが多い。進路研究の克服すべき課題として、人によって出会うイベントが異なる、個人レベルの環境的背景に影響される部分が多いなど、さまざまな多様性が指摘される。このような多様性にどのように対処していくのか？

- ・対処法に影響する2つの視点

進路研究場面は、それぞれで研究として確立されるだけの課題固有性を持っている（たとえば、高校進学場面、大学進学場面、就職活動場面 etc.）

イベント毎の研究、サポートの方法が考えられるべき

VS.

進路研究は、その人間の（安定的な）特性が発揮される一場面をとらえているに過ぎない

（たとえば、ある特徴を持っている人間であれば、大学進学場面でも就職活動場面でも、また他の選択場面でも同じような認識・行動をする）

そうであれば、その特徴を変容させることで、さまざまなライフイベントに対応できるサポートが提案可能。

- ・個人的経験から

いろいろと学生を見てきた経験をふまえて、何かを考えたり思考的操作をするときには個々人が癖を持っているような気がする。なので、個人内の認知・判断システムは後者（安定している）のような見方がとれるのではないか。

これが認知的アプローチの持っているひとつのメリットになるのではないかと考えている。（でも、予想を裏切られることもあるけど）

- ・発表者への問いかけ

今回発表された研究に含まれる概念は、どの程度安定しているものと考えられているのだろうか？ また、従来の進路研究の中で採用されている認知的概念、意思決定プロセスは、その枠をこえて、どの程度まで一般化できるのだろうか？

期待- 満足の関係 満たされるという感覚の発生メカニズム

類推的思考

意思決定スタイル

情報探索方略 情報解釈

このあたりが明らかになることで、進路研究の特殊性と、認知領域をはじめとするさまざまな他領域の研究知見の応用可能性が見えてくるのではないか。